

「もとはこちら」のお話し

№38 今月のテーマ

極めれば 自他一如

2010年(平成22年)2月20日(土)



神 イコール 自分
神 イコール あなた
神 イコール 有情無情(うじょうむじょう)
神 イコール 山川草木(さんせんそうぼく)
神 イコール 森羅万象(しんらばんしょう)

あなた＝自分

(平井謙次著 「自己を生かす道」 より)

健康で社会的地位もあり、経済的にも恵まれ、人も羨むような暮らしをしている人がいます。しかしそんな彼にも、心に影を落とす気がかりな事が、ひとつありました。それは離婚して帰ってきた妹さんの事です。彼女は心を病んでおりました。病が原因で離婚となったのか、それとも離婚が原因で心を病むようになったのかは聞きませんでした。とにかくその妹さんが、兄である彼を頼りにしすぎるというのです。何かにつけては彼の元を訪れ、その回数が増えるようになり、最後には彼の姿を求めて、毎日のように職場にまで訪ねて来るようになり、これにはさすがの彼も困り果て、何とかして妹を立ち直らせ、自立させたいと考え、時には居留守を使い、また時には必要のない外出をするなどして、できるだけ妹から離れようとするようになり、なりました。

ところがこの事が、いよいよ妹の不安感を募らせてしまつ結果となつたようでした。妹は今までも増して、兄を追い求める様になってしまいました。困り果てた彼の話を聞き、「今のように逃げ隠れしないで、妹さんが心から安心できるように、しっかりと抱きとめてあげたら如何ですか?」とアドバイスさせてもらいました。ところが彼は、「そんな! 兄妹の仲でそんなこと、絶対にできませんよ!」と血相を変えて激しく抵抗しました。思いがけない彼の態度に驚き、初めは私も何が訳が分からなかったのですが、原因はどうも私の表現のまずさにあつた様でした。「抱きとめる」と言った言葉を、私は当然の事ながら、それは彼の気持ちの持ちようの事を言つたつもりだったので、ところが聞いた彼の方は何の疑いもなく、それは体の事を指していると思ひ込んだ様でした。

このように、「こんな分りきつた事は、なにも今更改めて説明するまでもないだろう」と思つて、言葉や説明を省略すると、本当に思ひもかけない様な誤解が生じる事が時にあります。その時は笑つてすぐに訂正させてもらったのですが、こういう言葉の上での行き違いが、平井先生の「もとはこちら」という事に付いては、万が一にもあつてはならないと思います。そこで今回はできるだけ言葉を省略せずに、平井先生が教えて下さった「もとはこちら」の一番基本となる事を思い出し、原点に立ち帰り、一緒に復習してみたいと思います。

北原ゆり筆

絶対世界と相対世界

まず、最初におさえておきたい事は、私達の住むこの現実の世界というのは、相対の世界であるという事です。

相対の世界という事は、五感に触れる世界であり、色や形や現象などが見える世界という事です。第六感というのも当然のことながら、この相対世界の中に入ります。

そして色や形や現象があるという事は、例えば、大きいと小さい、高いと低い、白いと黒いなどのように、比較する相手のものがある世界という事です。そもそも初めから比較する物が何もないければ、そのモノ自体は、大きいも小さいも、重いも軽いもありません。

そしてまた、これも少し考えてみれば誰でも分る事ですが、この相対の世界には、究極絶対というものはありません。例えば左と右ということについて言えば、究極絶対の左とか、究極絶対の右などというものは、存在しません。左があるから右があるし、右があるから左があるのです。

善も悪もまた相対的なものであって、同じ事も見方次第で、善とも言えれば悪とも言える、そういう両面を持った世界が私達の住んでいるこの相対の世界です。善の中には悪があり、悪の中にも善があり、また、生の中に死があり、死の中には生があるのです。

こういう相対の世界に対して、もう一つの世界、絶対の世界というのが厳然として実在しています。

こちらは比較する相手となるものが一切無い世界です。比較するものが無いということは、言葉は勿論、色や音、絵などの何をもつてしても、それ自体を表現することができない世界ということなんです。五感(六感を含む。以下同じ)に触れる事のない世界であって、目で見る事もできず、耳で聞く事もできず、有って無い、実在の世界です。

元々の世界であり、ひとつの世界であり、渾然一体の世界です。

この絶対世界の事を宗教などでは、「空」とか「無」というような言葉で表わす事が多いのですが、それは、空っぽで何も無いという意味ではなく、どんな手段を使っても、表現の仕様の無い世界という事をいつているのです。

例えば、光の源となるものは、それ自体は決して私達の五感に触れる事はありません。

しかし、光を映し出す闇のようなものがあれば、即ち相対の世界に映し出されれば、私達は自分の五感を通して、光を見ることが出来る様になります。

そして尚、その完全無色の光に、プリズムや霧などの縁となるものを当てれば、光は分光され、今までは決して見る事が出来なかった七色十色の色が瞬時に現れ、光の中から様々な色が浮かび上がり映し出されて、私達はそれを、色のある光として見る事が出来るようになるのです。

これらの事から、完全無欠の絶対の世界というものは、それ自体は決して私達の五感に触れる事はないという事が分ります。

しかしその見えない世界も、縁となるものを通せば、その中から様々な個性あるものが現れ出て、それを姿や形のあるものとして私達は認識し、見ることが出来るようになるのです。

このことから、今この世に現れ、存在しているように見えている全てのものは、元々は、その完全無欠で目には見えない絶対の世界の中にあつたということが分るのです。勿論私達一人ひとりも、元はその見えない絶対世界の住人であるという事です。

分かれて見えるが、元はひとつ

私達は、先ずは、こういう総ての全ての土台となり、次々とあらゆるモノを生み出し、あるいは消滅させている、目には見えない絶対世界の存在に気付く事が何よりも大切です。そしてその絶対世界と、それが造り出しているこの目に見える相対世界との関係をはっきりと知るとともに、絶対世界にも相対世界にも貫いて生き続けている「本来の自分」というものを知ることが必要です。

繰り返しになりますが、私達の住む色や形のあるこの世界というのは、元もとはこの絶対世界が、縁となるものを通して現れ出た、結果の世界であるという事です。結果というのは誰の目にも見えるのです。

例えば、映写機とそこから映し出される映像のようなもので、映し出された映像は、誰の目にも色や形あるものとして見えるのです。それでこの世とは、元もとの世界が写し出された影のような世界であるという事から、この目に見える現実の世界のことを、昔の人は、「写し世」などと言ったわけです。



写し出されたこの相対世界では、一つひとつのものが個性を持ち、個々別々の姿形となつて現れます。丁度無色透明の光に水蒸気を通せば、美しい七色の虹が現れるのと同じです。

ではその絶対世界というのは、一体どこにあるのかということですが、それはどこか知らない遠い所などあるものではありません。ただいま即今、今この、この場所に見えない絶対世界があるのです。

平井先生はこの事を指して、「本来の自分は、目よりも近く、鼻よりも近いところにいる」と表現されました。そしてまたお釈迦さんは、この絶対世界と相対世界の関係を指して、「色即是空」と言われました。色、即ち目に見えるこの現実の世界は、そのまま、空、即ち目に見えない世界であるということなのです。

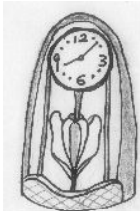
そして尚そのうえで、今度は「空即是色」と重ねて言われたわけです。これは単に言葉をひっくり返して言ったというような事ではありません。見えない世界と見える世界は、分けよつた無の完全一つのものであり、見えない原因の世界が見える結果の世界を造りだし、再びその結果がまた新たな原因となつて次の形ある世界を造りだす、そういう無限に続く自然現象という事を通して、私達の命というものは永遠無限のものだという事、色即是空、空即是色という言葉で表現されたのです。

命が造り出すもの

さて今、この絶対世界とは目に見えない世界であると申しました。元々、影も形も無い世界です。ですからそこに充滿しているものそれ自体は、決して目で見える事も感じ取る事もできません。

この事を簡単な例で説明してみますと、自分が部屋の中で熟睡していて、窓の外で揺れ動く木々の様子を見る事も無く、また風に鳴り続ける電線のピューピューという音も聞く事がなければ、部屋の外でどれほど強い風が吹き荒れていたとしても、風が吹いている事は分りません。揺れ動く木々や、揺れて鳴る電線の音など、風の影響を受けて変化するものの動きを、目や耳などの自分の五感を通して知る事で、初めてそこに風が吹いている事が分るのです。私達は、風そのものの存在を、五感を通さずに認識する事は出来ません。

この事からも分るように、「命」そのものは宇宙いっぱいには満ち満ちてお



りながら、その存在を、五感を通さずに知る事は、絶対に出来ないということなのです。しかし風が吹いている事が木々の動き等で分るように、命が働いた結果の姿は、この相対世界に写し出され、誰の目にも明らかになるのです。

たとえば肉体の誕生や成長に伴う姿形の変化、病気の時の自然治癒力や肉体の死などというような、肉体の変化を見る事によつて、命の存在を知る事が出来るのです。

肉体は命そのものではありません。肉体というものは、命の働きが作り出した命の作品であり、命の器、命の影のようなものです。

私達の本体は肉体の方にあるのではなく、命の方にあるのです。しかし、残念ながらこの事を理解する人は本当に少ないようです。

殆どの人が、肉体自分を生み出し、生かし続けて下さっている大元の命の存在に思い至らないままに、目に見え、現れた肉体をみて、それが自分だと思ひこみ、せいぜい進んだ人でも、「この肉体や意識が自分である」と思っております。

そして肉体や意識が無くなれば、自分の命もなくなると思いながら生きているのです。

しかし私達の命というものは、この結果の世界、肉体の世界だけにあるわけではありません。大元の原因の世界の中にも、結果の相対世界の中にも貫いて存在し、永遠無限に生き続けているのです。

そしてこの事は、一人ひとりの深い意識、無意識の意識では、全部の人がちゃんと分っているのです。分っているから、生まれてから死ぬまでの期間を一つの単位として捉え、「この一生」という言葉を使うのです。

すべてのものを造り出す大原因者は、有るとか無いとかいうようなものではありません。存在を超えた、絶対の存在です。この絶対の存在を指して、神と言っても大生命と言ってもいいのですが、その絶対の存在が必要に応じ様々な個性となつて、この現象の世界に仮の姿となつて現れ、また隠れたりしているのですが、大生命そのものの自体は、決して消えて無くなることはありません。

この世とは、結果が現れてくる世界

繰り返しになりますが、私達の五感に触れるもの、即ち毎日当たり前の



ように、見たり聞いたりしている形や音、現象などというものは、全て次々と現れては消えていく、実態のない幻のようなものです。

そして今ここに現れては消えて行く、この幻であり現実でもある世界を造り出しているものは、先程も言いましたように、大生命そのものであるとともに、一人ひとりが過去に生きた時に経験した、様々な出来事です。過去に体験した全ての事が、一人ひとりの魂にはしっかりと刻み込まれております。

この相対の世界では、自分が過去に体験した全ての事が小原因となり、縁となるものを呼んで来て、摂理に則って摂理通りの結果の姿が、次々と現れては、また消えて行っているのです。

そういう中であつて何よりも大切な事は、「結果というものは、必ず、原因となつたものところに現れる」という事です。原因と結果は、必ず一つところにあるのです。

これがすべてのものに平等に働く自然の摂理であり、大原則であり、神の法則です。

勿論人間の場合もこの法則通りに全ての事が起きては現れ、全ての人が例外なく、そういう摂理通りの人生を生きているのです。

要は、私達が日々体験し続けている事の原因は、全て自分の過去の中にあるという事です。

以上の事を煎じ詰めて言えば、自分の人生の運命や宿命を造っているものは、自分の過去の生き様の中にあるという事です。そして、これからの自分の生き方が、将来の自分の人生を造るという事です。

今日の次には必ず明日という日が来るように、今世の次には必ず来世があり、今のこの肉体の衣を脱ぎ捨てても、魂であるところの今の個性はそのまま、この人生の続きを来世でするのです。

究極の幸せ

ところで、私達人間とは、一人残らず幸福を求め続ける生き物です。

そして全員全部が必ず向上浄化し、幸福にいたる人達ばかりです。

その為にすべての人が「本来の自分というものに、気付かなければなら



ない」という、運命宿命を背負っております。なぜなら物事の道理として、「本来の自分」というものが分らなければ、「本当の自分の幸せ」という事についても、分かりようがないからです。

この「本当の自分の究極の幸せ」とは、置かれた状態や条件によつて左右されるような、そういう相対的な幸せではなく、どんな中にあつても、生きても死んでも、金持ちになつても貧乏になつても、健康であつても病氣であつても、自分は幸せだといえる、揺らぐことの無い絶対の幸せです。この究極絶対の幸せを得るために、私達は何回も何回も生まれ変わり、死に変わりをしながら、必要な体験を次々と重ねているのです。

そして様々な肉体的、精神的体験を通して、「形としてこの世に現れたものは、すべて相対世界に現れた、仮の姿、幻の姿である」という事や、「本来、他人などというようなものは、どこにもない。全てが自分であり、全てが同根一体である」という事を、そしてまた「自分とは、常に神と一体であり、生き通しの存在である」という事などを、骨の髄に及んで深く学んでいく事になります。

肉体の体験を通してのこの魂の修行は、意識の上で自分と他人の区別がなくなり、完全な自他一如の状態になるまで続きます。

そして心的にも霊的にも、完全な自他一如の状態になつた時、その人は荒い波動である肉体衣を脱ぎ去り、二度と再び、人間としてこの世に生まれてくる事はなくなると言われています。

中には特別な使者として、人間の姿形を身に付けてこの世に現れる、菩薩界の特別な魂がいるとも言われていますが、菩薩界の殆どは肉体をもたず、ということとは、目には見えない様々な働きそのものとして、この世に現れておられます。

あの浄土門の教えの中に出てくる法蔵菩薩様も、「人間界に只の一人として不幸な人がいれば、絶対に自分は仏にならない」と言い切っておられます。ですから人間としてどれほど罪深い私達であつても、一人残らず、必ず救われる事が約束されているのです。

ところがこの「仏にはならない」と誓願を立てられた法蔵菩薩が、すで

に阿弥陀仏という仏になっておられるというところが、実は大変重要なところですよ。この事が何を示しているかというところ、菩薩は既に総ての人を救ったという事を表わしているのです。

私達はすでに全員全部救われているのです。だからこそ、自然に逆らう悪の道、即ち道徳的倫理的な悪だけではなく、不幸になるような生き方や、災難に遭う様な生き方、自然を乱す生き方をすると、必ずそこに大きな障壁が現れ、即ち病気になるったり貧乏になったり、あるいは災難に遭ったりするという事です。

そういう壁にぶつかることで、これまでの生き方や考え方の間違いに気付かされ、幸せに生きる道、命が喜ぶ自然の道に行くようにと、神仏は手を差し伸べて、私達の行く道を軌道修正されるのです。

そしてまた、一人残らず救われているからこそ、人生の果てには、必ず、誰にでも休息の機会が与えられるのです。

「死なない人など、一人としていない」という事実が、神仏が「ただの一人として絶対に見落とさないで、必ず救う」と、固く約束されたことの証であり、全員救済の表れでもあるのです。

生まれてくるのも、死んで行くのも、全ては神の法則通りであり、只の一人として自然の摂理に逆らって生きる事は、絶対に許されないのです。神は絶対世界をも相対世界をも貫き、私達総ての人を救い、導き続けて下さっているのです。

もとはこちらの落とし穴

さて「もとはこちら」についてですが、これは、今までにも何度も言うておりますように、「自分が体験した事の、その全ての原因は、自分にある」という事です。誰にでも当てはまる自然の法則、神の摂理で、例外は絶対ありません。「もとはこちら」という言葉は、しっかりと噛みしめ、自身にありませぬ。刻み込むべき言葉であり、修行の糧とするべき言葉です。

ところがこの「もとはこちら」という言葉を聞いて早合点し、「あつ、そうか。自分が体験した事は、全部自分に原因があるのだな」と全て分ったようなつもりになっている人が、よく落ちる穴があります。



それは、いわゆる他人の不幸を知った時、「不幸の原因は、あなた自身にある」「そんな目に遭うのは、おまえ自身が悪いからだ、当然の事だ」等と言って、不幸な人を冷たい目で眺め、批判したり裁いたりするという事です。これは大変な間違いです。

「もとはこちら」の真意を深く理解した人は、決してこういう穴には落ちないはずですよ。

不幸な人を見た時は、「そういう困っている人、苦しんでいる人を見るという事は、見なければならぬ、何らかの理由や原因が、自分の中にあるからだ」と考える筈ですよ。

見るも因縁、聞くも因縁と昔からよく言われますが、まさにその通りであつて、自分自身の中に、そういう不幸な事を見聞きしなければならぬ原因がなければ、自分の外にそれを見聞きすることは絶対にありません。

「あなたがこんなに不幸なのは、あなた自身が悪いからだ」「原因はあなたの中にある」と言えるのは、全知全能であり、完全無欠の神様だけです。

不完全で欠点だらけである幼い魂の人間が、自分以外の誰かに向かって、高いところから偉そうに言う言葉ではありません。

繰り返しになりますが、もとはこちらという事は、宇宙の真理であり、誰にでも当てはまる言葉です。しかしどんな場合であつても、これはあくまでも自分自身に向けて言う言葉であつて、間違つても他人に向かって言う言葉ではないのです。

あの菩薩界の菩薩でさえも、「人の世に不幸な人がいるのは、自分の働きがまだまだ足りないからだ」と、その原因を自分に求め、人々を一人残らず目覚めさせ、気付かせ、幸せに導く為に、日夜休むことなく働いて下さっているのです。

全ての人は 菩薩の現われ

人間とは、絶対的存在である神から分かれた神の現れであり、神の心を生まれながらにして持つ神の子です。

そんな私達は、不幸な人を見る事によって、誰もが生まれつき持つてい



る心の中の菩薩心が呼び覚まされ、その心が育まれ成長していくのです。

もしも、もともと自分の中に菩薩心などというものがなかったならば、どんな縁に触れようと、それが芽吹いたり、育ったりする事はない筈です。

そしてまた反対に、どれ程沢山の菩薩心の種があつたとしても、縁となるものが何もなければ、決して菩薩の心が芽吹く事も、育つ事もありません。

私達の菩薩心を目覚めさせ、育てる縁となるもの、それはいま自分の目の前で困っている人や、苦しんでいる人達です。

これらの人達が、ご自身は病氣や貧乏などの現実的なご苦勞をされながら、それに接する私達の心の中にある菩薩心を芽吹かせ、育て、菩薩の道へと私達を導いて下さっているのです。

医学の発達や政治の正しいあり方などを模索させ、全ての人々を幸せに導く為に、自らの身を捧げて下さっている人達です。

このことを深く解釈すれば、全ての人が人間の肉体衣をまとって現れたこの世の菩薩であり、互いを助け合い、育て合い、導き合っているという事が分ります。

ですから私達は現実に困っている人を前にした時は、自分を救って下さる仏様を前にした時のように、相手の中に宿る菩薩の魂を敬い、供養をさせて頂くという心が大切なのだと思います。

そして自分にできる援助を、心を込めてさせて頂くというのが、人間としてのとるべき態度だとも思ふのです。

そのためには、相手の幸せを心から祈る事は勿論ですが、単なる祈りだけで終わるのではなく、こういう相對の形ある世界に住むものとしては、そこに少しでも現実的な形のあるものを添え、それを温かい心と一緒に届けるようにするのが、より好ましい姿ではないかと思ひます。

この肉体の世界、相對の世界にありながら、肉体を越えた絶対世界の存在をはつきりと知った人、時間空間を貫いて永遠に生き続けている自分と神の關係をはつきりと知った人は、不幸な人も、幸せな人も、氣に入つた人も、氣に入らない人も、あらゆる人がもう一人の自分であるという事を、

疑いの余地なく悟る筈です。

一人ひとりの個々別々の肉体や意識などというものは、大生命から分かれた、命の仮の姿です。私達の本体は、誰もが神と一つのものであり、全てのものと分けようのないもののなのです。

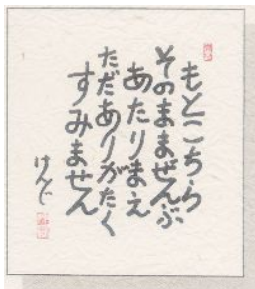
神と一つである自分、そして全ての存在が自分であるという事は、今ここが、この場所が、仏の国であり、私達はその国に住む菩薩であるという事です。

死んでからどこか遠くにあるかもしれない仏の国に行くというのではなく、今生きているこの場こそが、正に仏の国であり、私達全ての人が神の現れであり、菩薩なのだという事です。

自分以外のものが一切なくなった時、完全な自他一如の状態になった時とは、裏を返せば、自分というものが無くなった時ということです。

それが無であり空であり、絶対の世界です。神仏をも超えた、有つて無い世界です。「もとはこちら」です。

何はさておき、そういう自分の本体を知る事こそが「生まれ来し その第一義」であると、平井先生は断言されたのです。



編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com